

# チャーリーとチョコレート工場

2005(平成17)年9月11日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督=ティム・バートン/出演=ジョニー・デップ/フレディー・ハイモア/ディープ・ロイ/ノア・テイラー/ヘレナ・ボナム=カーター/クリストファー・リー/デイビッド・ケリー/フィリップ・ウィーグラッツ/フランツィスカ・トローグナー/ジュリア・ウィンター/ジェームズ・フォックス/アナソフィア・ロブ/ミッシェル・パイル/ジョーダン・フライ/アダム・ゴドリー (ワーナー・ブラザーズ映画配給/2005年アメリカ映画/115分)

## 第2章

映画は楽しめるのが一番！

……イギリスには、『指輪物語』や『ハリー・ポッター』、そして来年3月公開の『ナルニア国物語』など、日本人が全然知らない人気小説がたくさんあり、これもその一つ。果たして大人も楽しめる映画……？ ティム・バートン監督、ジョニー・デップ主演だから面白いのは当然……？ 見学を許された5人の子供とその保護者たち、そしてこれを案内するちょっとヘンなキャラのウォンカ氏が見せるのは、巨大なチョコレート工場の驚くべきファンタジーだけではなく、意外な人間ドラマ……？ そしてその結末はえらくシンプル……？ 9・11総選挙で小泉自民党が圧勝した原因がシンプルな争点設定にあったことをみれば、この映画も予想以上に大ヒット……？

## 🎬原作は？

この映画の原作は、1964年に出版されたイギリスのロアルド・ダール原作の『チョコレート工場の秘密』。40年以上経った今でも全世界で32カ国語に翻訳され、1300万部以上販売されているとのこと。そしてイギリスでは、『ハリー・ポッター』『指輪物語』に次いで子供が好きな本の第3位にランクインされているとのこと。

もっとも、来年3月に公開されるウォルト・ディズニーの大作『ナルニア国物語』も、『ハリー・ポッター』『指輪物語』と並ぶ壮大なファンタジーの最高傑作とのことだから、さすが大英帝国は作家の質と量においても人材が豊富……？

## さすが産業革命の国イギリスだが……？

この映画の舞台は、当然ながら原作のロアルド・ダール氏が生まれた国イギリス。しかしその時代設定はよくわからない……？

主人公のチャーリー少年やその家族たちの生活レベルや服装そして工場労働者たちの姿を見ていると、いち早く産業革命を成し遂げたイギリスが全世界に君臨していた時代……？

しかし産業革命の時代にチョコレートというチョー贅沢なお菓子があふれていたはずはない。しかも映画の冒頭に写し出される、ウィリー・ウォンカ氏のチョコレート工場から出荷される商品は、完全オートメーション化された製造過程の中で輸送車に乗せられ、日本、アメリカその他の国々へ……。こりゃ現在を乗り越えた近未来の姿……？

まあこの映画を観るについては、そんなことはあまりシビアに考える必要はないのかも……。もっとも、さすが産業革命の国イギリスと感心させられるとともに、何の容赦もない労働者の首切りなど、マルクスとエンゲルスが描いた(?)あの時代の資本主義社会の矛盾もチラホラと……？

## 5枚の「金のチケット」とは？

この映画の物語の骨格は、突然ウィリーが発表したチョコレート工場の「見学ご招待」の案内だが、その「金のチケット」はわずか5枚のみ。門が閉じられたままで人が出入りするのを見たことがないにもかかわらず、ウォンカ社のチョコレートが連日全世界へ出荷されるのはなぜ……？

そんな疑問と憧れを持つ子供たちが、この発表に目を輝かせたのは当然。そのうえ、5人の中の1人にはチョー豪華な賞品もつくとあって、全世界は大騒ぎ。過大な景品をエサに商品の販売をすることは、日本では「不当景品類及び不当表示防止法」によって禁じられているが、労働者の首切りも自由な(?)この時代のイギリスでは、そんな小難しい法律など関係ないよう……？

そんな宣伝効果もあり、ウォンカ社のチョコレートは今まで以上に売れに売れたが……？

## イケ好かない4人のガキたちとその親……？

この映画の面白さの1つは5人の当選者たちのキャラだが、まずはイケ好かない4人のガキたちが次々と当選。1番目は、ドイツのデュッセルドルフに暮らす、9歳の男の子オーガスタス・グループ（フィリップ・ウィーグラッツ）だが、これは食い意地の張った毎日チョコレート三味の肥満児……？ 母親のグループ夫人（フランツィスカ・トログナー）もその暴食を止められないダメ女……？

2番目は、イギリスのバッキンガムシャーに暮らす、資産家の9歳の令嬢ベルカ・ソルト（ジュリア・ウィンター）だが、その父親ソルト氏（ジェームズ・フォックス）は、「金のチケット」欲しさに何十万個ものチョコレートを買占めたという親バカの典型。したがってその娘も、欲しいものは何でも手に入れば気が済まないという、チョーわがまま娘。

3番目は、ジョージア州アトランタに暮らす、チューインガム噛みの世界ジュニア・チャンピオンというバイオレット・ボーレガード（アナソフィア・ロブ）。母親のボーレガード夫人（ミッシー・パイル）とともに、すべての競争に勝ち抜くという野心と頑張り精神を持っているのはいいが、その自信はちょっと異常……？

4番目は、コロラド州デンバーに暮らす、13歳のハイテク世代の申し子ともいえるべきマイク・ティービー（ジョーダン・フライ）。チョコレートは嫌いで食べたこともなくせに、天候と株価の動きを参考に、製造日から「金のチケット」の所在を確定したとのことで、チョコレートを1枚だけ買って見事に当選……。もっともその父親のティービー氏（アダム・ゴドリー）は息子の言っていることをサッパリ理解できず、息子からバカにされている様子。

まあ、要するに一言で言えば、4人ともこのようなイケ好かないガキの典型であり、その保護者たちも親バカの典型……？

## 主人公は、やさしく家族思いのいい子供

この「悪ガキ」4人に対し、映画の冒頭に登場する主人公チャーリー・バケット（フレディー・ハイモア）はホントにいい子供。チャーリーが住む家は大きく傾いているが、そこで両親を含め一家7人で暮らしている。その収入源は、父親

のバケット氏（ノア・テイラー）が働く歯磨き製造工場でのキャップつけの仕事のみ。それだけで一家7人を養っているため、生活は非常に貧しく、毎日の食事は限りなく水に近いキャベツのスープのみ。さらにバケット氏の仕事が機械化（自動化）された結果、バケット氏は突然クビの宣告を……。

また、チャーリーの祖父のジョーおじいちゃん（デイビッド・ケリー）は、もともとはウォンカのチョコレート工場に勤めていたのだが、ウォンカのチョコレートづくりのレシピが盗まれるという事件が発生したため、ウォンカは突然労働者全員を解雇。それによってチョコレート工場は長い間閉鎖されることになったのだが……？

こんな生活の中でも、チャーリーは家族たちといつも心暖まる生活を続けていた。そのチャーリー少年の唯一の楽しみは、毎年誕生日の日に買ってもらえる1枚のチョコレート。彼はそのたった1枚の板チョコを1カ月かけて少しずつ食べていたのだった。「金のチケット」の話聞いたチャーリーやその家族たちは、恒例の誕生日に、みんなが注目しながら1枚の板チョコの包装を破っていったが……？ しかし、そりゃ確率的にかなり無理……？

さらにその後、ジョーおじいちゃんはヘソクリを使ってもう1枚のチョコレートを……？ さてその結果は……？ 果たしてチャーリーは残った1枚の「金のチケット」を射止めることができるのだろうか……？

## ウィリーもかなりヘンな奴だが……？

この映画ではジョニー・デップ演じるウィリーは、チョコレートづくりの天才だということだけで、その商品開発能力や経営能力については、具体的に何も説明していない。多分、原作でもそうなのだろう。なぜならこの映画は、私が感心して観た中国映画の『CEO（最高経営責任者）』（02年）のように、「そういうこと」を勉強させるための作品ではないのだから……。

しかしこのウィリーは、技術者としても、経営者としてもさらには1人の人間としてもかなりヘンな奴……？ まずはその奇抜な服装とちょっと変わったしゃべり方、そしてなぜか両親の話になると言葉が詰まってしまうヘンなクセ……？ さらに、子供たちに対して接する彼の態度から垣間見ることができるのは、どう

も彼は子供ギライ……？

そんなウィリーが5人の子供を招待し、その中の1人にアッと驚く特別な賞品を与えるという企画をしたのはなぜ……？ またその賞品とは一体ナニ……？ それがこの映画の本来のテーマだから、十分ご注意ください……。

## ティム・バートン監督のファンタジーに感動！

私はティム・バートン監督を、最近観た『ビッグ・フィッシュ』（03年）と『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』（93年）ではじめて知ったが、その中で彼が描くファンタジーの世界には大いに感心したものだ。近々公開される『ティム・バートンのコープス ブライド』も、『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』と同じような人形づかい（？）のアニメ映画で、彼の世界そのもの。パンフレットを読むと、彼は1989年の『バットマン』で大成功したとのことだが、スクリーン上で展開されるこのチョコレート工場の美しい映像は、『バットマン』の世界ではなく、私がよく知っているティム・バートン監督のファンタジーの世界そのもの……。

## シンプルなテーマにも感動！

2005年9月11日に実施された衆議院議員総選挙の投票結果は、予想を大きく上回る「小泉」自民党の圧勝！ その原因は何か？ それは、去る8月8日の参議院本会議における郵政民営化法案の否決を受けて、間髪を入れず決断した衆議院の解散・総選挙において小泉総理が提示した、「郵政民営化法案に賛成か反対か」というシンプルな争点の設定。本来、民主党の岡田党首をはじめとする若手グループは、みんな郵政民営化を中心とする構造改革には賛成しているはず。ところが、「郵政民営化には反対ではないが、小泉自民党提案による郵政民営化法案には反対……」などとややこしいこと（？）を言ったものだから、次第に対応が後手後手になり、シンプルな争点設定をした小泉自民党にやられてしまったというのがその実態だ。映画は5人の子供とその保護者たちが、楽しくチョコレート工場を見学する中で、次第に分かれていく「勝ち組」と「負け組」の様子を描写していくが、平成の天下分け目の「関ヶ原の合戦」当日の9月11日に私が観たこの

映画が、最後に観客に提示するシンプルなテーマとは……？

それは、小泉総理が今回の総選挙の争点として示したものと同じように、明確でわかりやすいもの……？ そうであれば、この映画も、小泉自民党と同じく予想以上に大ヒットするかも……？

## イチャイチャのアベックには困ったもの……？

この映画は子供だけではなく、大人も大いに楽しむことができるファンタジー。そういえば、満席となった本日の上映は、子供連れの家族もいたものの、若い男女のアベックがやけに多かった。これは多分、彼女側の要望に沿った映画の選択だろうが、こんな夢の世界に浸った後は、もっと2人だけのファンタジーの世界にと望んでいるのでは……？

一般的な話としてはそれで別に文句はないのだが、1人で早い目に座席に座っていた私のすぐ前の席に上映直前に入り込んできたのは、かなり大柄なアベック。その上背だけでもかなりうっとうしいのに、この男はきっと映画終了後の予定も決まっているのだろうと思わせるように、映画上映中ずっと、女の席に長い手を伸ばし、女の手を握りながらさかんにイチャイチャと……？ お前ら、公衆の面前でええ加減にせい……！

2005(平成17)年9月12日記

### ミニコラム

#### 天才ジョニー・デップに拍手！

私は3月6日、韓国のチェ・ミンシク主演の新作映画『春が来れば』と『クライング・フィスト』を2本続けて観たが、ジョニー・デップも去年は『チャーリー……』と『コープス ブライド』の2本が同時公開。今上映中の『リバティーン』もすごい。これは17世紀のイギリスに実在した放蕩詩人、第2代ロチェスター伯爵の物語だが、

ここでの彼の演技は絶賛モノ！ 今年夏公開の『パイレーツ・オブ・カリビアン』での船長役を含め、よくこれだけ異質な役柄を演じきれるものと感心。さらに、稼ぐべきハリウッド大作と役者としてのプライドを貫く映画を両立させている彼に拍手！

2006(平成18)年4月19日記